グリニッチ福音キリスト教会　2009年10月18日
Manna マナ 062　週報 966 付録

【先週のメッセージより】

「生ける神を知る幸い」

Ⅰ列王記16:29～17:16

●生ける神を体験したエリヤ

預言者エリヤは神に従わず偶像礼拝を持ち込んだ王に対して、二、三年は雨が降らない、というきびしいメッセージを語らなければならなかった。そのために命を狙われるはめになるが、神はエリヤを隠し、ケリテ川のほとりでカラスにより養った。さらにやもめの世話になるように導き、飢饉の期間養われた。エリヤは危険から守れることを通して生ける神を体験した。

●生ける神を体験したやもめ

食料が底を尽き、息子と共に最後の食事をして死のうとしていたやもめは、信仰を持って預言者エリヤに最後の粉で作ったパンを差し出した。その結果、飢饉の間中、カメの粉が尽きない、という神の恵みの奇跡を体験した。信仰の一歩を踏み出したことによる奇跡の体験であった。

●生ける神を体験しつつ、神を知ることがなかったアハブ

偶像礼拝に陥いり、神の裁きとしての干ばつと飢饉を国に及ぼしてしまったアハブであった。彼は生ける神の裁きを現に体験したにも関わらず、それが、神からのものであるとの認識がなかった。しかもエリヤを殺そうとして、唯一の問題解決である神に立ち返るための道を自ら断とうとする愚かさの中にあった。

●私たちも生ける神を体験しよう

私たちの心のうちには神に逆らい、偶像礼拝をし、罪を楽しみ、罪を犯し続けようとするアハブが住んでいることを認める必要がある。神は時に、私たちの悔い改めの無さゆえに、そして私たちへの愛のゆえに、人生の干ばつを経験させられることもある。大切なことは悔い改め「助けてください」と叫ぶことである。

さらに、私たちやもめの立場をも経験することがある。最も大切と思ってしがみついている物を手放し、神の約束を信じる時に扉が開くという奇跡を是非体験したい。最後にエリヤのごとく、忠実に歩む者たちを神は必ず守って下さることを覚えよう。■

【今週の暗唱聖句】Ⅰ列王記18：24
「私は主の名を呼ぼう。そのとき、
火を持って答える神、その方が神である。」

1932年にラシュ・シャムラ遺跡より発掘された左のバアルの浮き彫りを見るとバアルは右手に斧、左手に稲妻を握っている。バアルこそ火をもって答える神である、と教えられ、信じられていたのである。そのような中で、エリヤは、あえて主（ヤーウェ）こそ火で答えられる方である、とチャレンジしたのであり、人々はその事実を知るようになったのである。■

【現代の預言者たちの過った教えのパターン】

イスラエルの人々はバアルの預言者達の声に耳を傾けてはならなかったのと同様、私たちもこの世の預言者たちの様々な教えを見分け、避けなければならない。現代流布している教えの代表的な４つのパターンを見てもらいたい。

１）良い行いをすることで救われる（ないし天国にいれてもらえる）

この教えは多くの宗教、道徳に共通している自力本願の考え方である。教会にちゃんと行き、献金さえちゃんとささげていれば大丈夫と考えるなら、この間違った考えに陥っていることになる。救いはイエス様を信じる信仰による。

２）自分自身に対して正直であり、嘘をついていなければよい

一見美しい生き方に見えるが、人間一人一人にある自己中心性、罪性に関する認識があまりに弱いのである。そもそも自分をすべての価値判断の基準に据えることほど傲慢なことはない。ヒトラーも自分に真実だったのでは？

３）道徳は個人的なものである

物理法則は世界共通であるが、道徳／心の法則は共通でない、ゆえに「あなたの道徳を押し付けないでくれ」という考え方である。この考え方の決定的な欠陥は、道徳が人との接点においてのみ発生するために個人的な道徳などは存在しないということである。そもそも、神は全ての人の心に十戒を刻み込まれたのである。

４）真理を知ることはできない

この考え方は実際に多くの事実や真理によって私たちの生活が成りたっていることを無視している。ビルからジャンプしたら下に落ちる、酸素が無ければ死ぬ。神についての真理はイエスによって示されたが、神が差し出している和解の手段を受け入れないなら、神との別離を体験する。これは真理であり、変えられないのである。

★私たちは常にこのような教えを見分け、罠にはまらないように気を配って行きましょう。■